

第 **18** 号…平成 31 年 1 月

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3 新年のご挨拶

4 亥年 年男、今年もよろしく申し上げます。

6 関東地域づくり協会からのお知らせ

第31回 道のある風景写真コンクール

平成30年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会を実施

平成30年度関東ブロック 災害復旧事業技術講習会を開催

関東・水と緑のネットワーク 平成30年度交流会

地域づくり研究所 活動報告

10 プロジェクトK³⁰

後世まで、安全・安心なまちづくり

母子島遊水地 小貝川激甚災害対策特別緊急事業

14 関東の河岸めぐり¹⁵

木下河岸 千葉県

16 関東の土木遺産³⁰

七重川砂防堰堤群 埼玉県

18 会員のひろば

I ☆ BAYSTARS

19 会員情報

新会員紹介・お悔やみ

編集委員会だより

20 ピックアップ 関東の道の駅¹¹村民と移住希望者の
触れ合いの場を目指して

道の駅「上野」



表紙の言葉

そりまち いぶき
反町維吹さん（群馬県高崎市立長野小学校6年生）

ひと休み

この写真は当協会が主催する第31回「道のある風景写真コンクール」で小学生の部金賞に選ばれた群馬県高崎市立長野小学校の反町維吹さんの作品です。「この写真は、お父さんとお兄ちゃんと一緒に、長野県のお祭りに行った時の写真です。お祭りの人が休憩をしている姿を撮りました。このような賞がとれてとてもうれしいです」。宮司の動きに変化があり、大きな傘を中心にした情景描写が高く評価されました。

理事長挨拶 新年のご挨拶

(一社)関東地域づくり協会 理事長
奥野晴彦



平成31年の年初に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

昨年末から新年にかけて、各所での挨拶のキーワードは、「平成最後の～」や「災害」が多かったように思います。一年を象徴する漢字が「災」であったとおり、去年は本当に災害の多い年でありました。ここ何年かのこの欄での挨拶も、災害の話題から始めるが多かったのですが、例年にもまして自然災害、災害被害が多かった年でした。6月の大阪北部地震、9月の北海道胆振東部地震では、震度6以上の強い揺れがあり、特に北海道厚真町では、震度7を記録し、多くの方がなくなりました。また広範囲で土砂崩壊があり、被災地の状況を映像で見たとき、一瞬何が起こったのかと我が目を疑いました。さらに、異常降雨や台風による水害、土砂災害、高潮被害も激しいものがあり、7月の西日本豪雨では、200名を超える尊い人命が失われました。

相次ぐ災害で、以前に被った傷跡がまだ癒えないところに、次の災害が襲うという地域もあり、被災者はもちろんのこと、災害対応に当たる関係者にも大きな負担がかかったものと思います。

このような災害状況を受け、国土強靱化を進めるため、平成30年度補正予算を含め、向こう3年間で総事業費7兆円に上る予算措置が行われることになりました。我が国では、自然災害の発生を避けて通ることはできませんが、災害の影響を極力小さいものにすることは不断に行わなくてはなりません。防災上ある一定のレベルに達していないインフラを強化することや、老朽化した施設の手当はもちろんのこと、国土全体の補完機能を向上させること（リダンダンシーを確保すること）も、国土強靱化には欠かすことはできません。この機会を活用し、インフラの強化、健全化を進めるため、関係者が一丸となって取り組む必要があります。様々な方面での人手不足が課題になっていますが、関係者全員が知恵を絞って品質に優れたインフラ強化を効率的に進めなければなりません。当協会としてもできる限りに支援を行っていく必要があると考えております。

平成時代も終わりに近づいているところから、平成とはどんな時代であったかということが昨年来、新聞をはじめとするマスコミで取り上げられています。人それぞれの見方があると思いますが、経済面で見ると「バブル崩壊」「失われた20年」「リーマンショック」といった言葉が浮かんできます。また、阪神淡路大震災、東日本大震災など、自然災害の大変多かった時代で

もありました。さらに、グローバリズムの進展により、世界のどこかで起きた出来事が、我が国に大きな影響をもたらす時代にもなってきました。決して平穏な時代ではなく、舵取りの難しい、激動の時代であったといえるでしょう。

当協会も平成後半は激動の時代でありました。様々な経緯を経て、平成25年に一般社団法人に移行し、事業譲渡による発注者支援業務等からの撤退を行い、人員規模も十分の一以下に縮小しました。まさに、超弩級の荒波に見舞われたと言っても過言ではないと思います。事業譲渡とあわせ、協会の今後の新たな事業展開を追求してまいりました。現在でも、十分な見通しを得たというわけではありませんが、これまでの活動から、協会に寄せられる期待がどのようなものかの感触を得ることができたと考えております。このことをベースに、今年は新たな時代に遷移する年でもあり、協会の活動も新たな方向に向け、強力に進んでいかなければなりません。

まず、一般社団法人移行時に策定した「公益目的支出計画」を着実に実施すること、特に協会に対する要請の強い「防災活動」や「地域活性化活動」などを充実させることが、取り組むべき大きな課題であります。そのため、このような事業を担っていただく防災エキスパート等の人材確保、訓練、講習などによるスキルアップに加え、活動に必要な防災機材等必要な資機材の充実を図る必要があります。

次に、公共事業の品質確保、直轄はじめ様々な主体で実施されるインフラの整備・管理に関する事業の円滑かつ効率的な推進を支援する事業（CM事業、事業促進PPP事業等）、インフラのメンテナンスのサポート、などの事業を協会の今後の重要な柱として位置づけ、体制を整えていかなければなりません。このためにも、人材の確保、教育研修、資機材の整備等を進める必要があります。

これらの事業展開のためには、協会の有する資産やノウハウ、技術を最大限かつ効率的に活用しなければなりません。決して簡単なことではありませんが、「今年は元号が新しくなり、新しい時代を迎えることとなるので、全力を傾けて新しい道を進んでいかなければならない」と強く感じているところです。会員の皆様には、引き続き強力なご支援、ご協力をお願いいたします。

終わりに、今年、あるいは新しい時代が皆様にとって素晴らしいものとなりますことを祈念しまして、平成最後の新年のご挨拶といたします。

2019

亥年

年男、
今年もよろしく
お願いします。

健康に、悔いのない人生を

昭和22(1947)年生まれ

河村 匡さん

菱和コンクリート(株)
元下館河川事務所
工務課長



あけましてお
めどうござい
ます。6回目の年

男を迎え、月日の早さに驚いている今日この頃です。

自分の干支のイノシシは脇目も振らずチョトツモウシ
ンに目標に向かっていく動物ですが、今までの自分は、
上司、同僚、沢山の友人に恵まれその方々に支えていた
だいて歩いて来ることができました。

現役時代には昭和61年8月の小貝川災害、退職後防災
エキスパートとして平成27年9月関東・東北豪雨の鬼怒
川災害で、堤防決壊の重大な災害に遭遇し貴重な体験を
しました。「災害は忘れたころにやってくる」と言われま
すが、最近は大型台風・集中豪雨など異例の規模、雨量
を記録する気象現象が発生していますので、気象状況に
はこれまで以上の注意を払い、災害等に備えたいと思う
日々です。

私生活では健康長寿を目指し、週数回の散歩(約
5km)、趣味のゴルフでもカートに乗らず歩くなどして体
力作りに心掛けています。老後の認知症防止には、休日
を利用して少年野球に携わり、子供たちと一緒にボール
を追いかけて楽しい時間を過ごしています。

これからの目標は、家族に迷惑を掛けなくて、悔いの
ない楽しい人生を過ごすことです。

今後ともよろしくお願いします。

感慨深い 節目の年

昭和34(1959)年生まれ

牧角 修さん

(一社)全国建設業協会 技術顧問
元関東地方整備局地方事業評価管理官



新年あけましておめでとう
ございます。昨年は、長く勤め

た国土交通省の退職と新たな職場への再就職という、私の
一生の中でも人生を考える大きなイベントがありました。
さらに今年、還暦を迎えると思うと、とりわけ感慨深い気
持ちになっています。

昭和59年に旧建設省に採用され、思い描いていた公務
員より少し忙しい日々を送り、仕事も含めて少し余裕が出
てきたところで役人生活を終えたようにも思います。皆さ
ま方のおかげで、つつがなく公務員を退職できたことに改
めて御礼申し上げる次第です。

年男としての抱負は特にありませんが、これからは今ま
でより少し心に余裕があるので、健康だけはなるべく長く
維持できるようにしていきたいと思っています。いつのま
にか人の名前が出てこなかったり、一年が短く感じられた
り、会話に病気と葬祭の話が多くなったり膝が痛くなっ
たりしていますが、休日はなるべく体を動かすことにしてい
ます。週に1回はプールで泳ぐことにしていますし、毎年2
回ハーフか10kmのマラソンを続けていこうと思っています。
ゴルフはしないので、趣味は山登りと釣り、バイクぐ
らいですが、これからでもできるものにはチャレンジして
いきたいと思っています。

私もあと何年健康で普通の生活が送れるかわかりませ
んが、皆さまもお体に気を付けてお過ごしください。これ
からもどうぞよろしくお願いいたします。



猪突猛進を抑え じっくりと取り組む

昭和46(1971)年生まれ

岩館孝明さん

(一社)関東地域づくり協会
業務企画部付(浦安)技術主任



新年あけましておめでとうございます

ます。今年で4回目、当協会に採用されてからは2回目の干支を迎えることができました。無事に2回目の干支を迎えることができましたのは、上司や諸先輩方、同僚など多くの方のサポート、ご指導等によるものと実感しております。この場を借り、厚く御礼申し上げます。

さて、今年度の干支について調べると、イノシシは十二支の中で最後です。それは猪突猛進と言われるように、周りも見ずにすごい勢いで走って、誰よりも早く神様の元へたどり着いたのですが、神様のところで止まることができず通り過ぎてしまい、あわてて引き返したときには11匹の動物が到着していて、最後になってしまった、という話です(汗)。本当は早かったのに最後にミスをしてしまったのです。

平成2年に社会人となり、平成8年より協会の業務に携わり、いろいろな仕事を、イノシシのごとく猪突猛進でやってまいりましたが、これからは猪突猛進を少し抑えて、十二支の話のようにならないよう、「神様のところで止まれるイノシシ」になれるよう頑張っていきたいと思いますので、これからも皆さまのご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いします。

2018年の 「今年の漢字」は 「災」

(公益財団法人日本漢字能力検定協会)

複数の地震、西日本豪雨、大型台風、猛暑など、全国各地で大規模な自然災害が発生。また噴出したさまざまな社会問題を人災と捉えた人も多かった

昨年を 振り返る

日本の出来事

- 1月 草津白根山噴火。1人死亡
- 3月 103年ぶりの新種のサクラ「クマノザクラ」発見
- 6月 大阪府北部地震発生
平成30年7月豪雨発生(6月28日~7月8日)、死者200人以上
- 7月 カジノを含む統合型リゾート法成立
熊谷市で観測史上最高気温の41.1度記録
- 8月 群馬県防災用ヘリが墜落。乗員9人死亡
山口県周防大島町で不明の男児をスーパーボランティア尾畠春夫氏が発見
- 9月 台風21号日本列島に上陸。関西に大被害
北海道胆振東部地震発生(M6.7)死者・行方不明者40人以上。大規模停電発生
安倍晋三氏が自民党総裁に3選
- 10月 ノーベル医学生理学賞に本庶佑氏
東京・築地市場閉鎖。豊洲市場開場
- 11月 「ナマハゲ」などがユネスコ無形文化遺産に登録
- 12月 BS・CSで4K・8Kの実用放送が開始
山手線新駅名は高輪ゲートウェイ

第31回 道のある風景写真コンクール

一昨年に第30回の節目を迎えた「道のある風景写真コンクール」。これを記念し、第1回からの各回で金賞・銀賞の荣誉に輝いた作品を収録した記念冊子を発行し、管内の公立図書館や道の駅、関係小中学校、高校等に配布しました。

第31回の今回は総数4,124枚、2,196

人の応募があり、写真家の木村恵一氏、熊切圭介氏、そして関東地方整備局道路部の伊與田弘樹道路情報管理官、当協会の後藤敏行専務理事の4名による審査で入賞作が決定しました。

入賞作品は関東の道の駅、千代田区役所ロビーなどでの展示を予定しています。



審査風景

主催：(一社)関東地域づくり協会／協力：ビックカメラ

金賞

「ひと休み」

反町維吹(そりまちいぶき)さん
群馬県 高崎市立長野小学校6年生

小学校の部



「跳べ!!」

中野未羽(なかのみう)さん
東京都 共立女子高等学校2年生

高等学校の部



中学校の部

「男の友情」

峯翔琉(みねかける)さん
埼玉県 さいたま市立大成中学校3年生



学校賞

小学校学校賞 埼玉県草加市立高砂小学校
中学校学校賞 茨城県常総市立石下西中学校
高等学校学校賞 東京都立工芸高等学校

銀賞



小学校の部

「夏休み！
昔の日本にタイムスリップ」

高村奏太(たかむらかなた)さん
埼玉県
草加市立高砂小学校4年生



小学校の部

「なすの川に行く道」

松山みお(まつやまみお)さん
埼玉県
草加市立高砂小学校4年生

中学校の部



「都会の道」高柳優都(たかやなぎゆうと)さん

茨城県
神栖市立神栖第二中学校
3年生



中学校の部

「梨収穫の帰り道」

小菅夏希(こすげなつき)さん
茨城県
下妻市立東部中学校2年生



高等学校の部

「右! 左! よし!」

西山千里子(にしやまちりこ)さん
東京都 富士見高等学校1年生



高等学校の部

「夏の日」

宇佐美光琉(うさみひかる)さん
埼玉県
獨協埼玉高等学校2年生



小学校の部

「朝の散歩」

大嶋琉弥(おおしまるいや)さん
茨城県
茨城大学教育学部附属小学校5年生

中学校の部

「雷雲道」石塚理真(いしづかりま)さん

茨城県 常総市立石下西中学校3年生



高等学校の部

「特別な帰宅路」

櫻井真奈(さくらいまな)さん
東京都 都立工芸高等学校3年生

ビックカメラ賞

平成30年度
関東地方防災エキスパート
支部別講習会を実施

11月15日（木）の甲府支部の講習会を皮切りに、各支部において「関東地方防災エキスパート支部別講習会」を実施し、12月3日（月）には下記の内容で「四支部合同講習会」を行いました。

今年度も全支部で約300名と、例年とほぼ同程度のエキスパートの方々にご参加いただきました。支部では、平成31年度完成予定のハツ場ダムなど、今後の防災エキスパート活動の参考になる現場視察を行いました。

平成30年度関東地方防災エキスパート支部別講習会実施状況

支部名	参加者数	実施日・時間	講習会場	関東地方整備局講師	現場視察等
水戸支部	28名	11月29日(木) 10:00～15:30	茨城県職業人材育成センター	飯塚洋二氏(企画部防災課建設専門官)	久慈川・国道50号
宇都宮支部	21名	11月27日(火) 10:00～16:00	ブライダルパレスあさの	中崎薫氏(企画部防災課建設専門官)	五十里ダム
高崎支部	39名	11月22日(木) 10:30～16:30	群馬県市町村会館	飯塚洋二氏(企画部防災課建設専門官)	ハツ場ダム
甲府支部	24名	11月15日(木) 10:00～16:30	ベルクラシック甲府	中崎薫氏(企画部防災課建設専門官)	尾白川砂防堰堤
長野支部	16名	12月 5日(水) 10:30～14:00	JA長野県ビル	塚本一三氏(企画部緊急災害対策調整官)	鬼怒川決壊対応講演
大宮支部	55名	12月 3日(月) 10:30～15:30	東京臨海広域防災公園 [そなエリア東京]	牛腸宏氏(企画部総括防災調整官)	地震と技術講演・ 防災公園施設見学
千葉支部	69名				
東京支部	12名				
神奈川支部	19名				
四支部合計	155名				
合計	283名				

■ 四支部合同講習会次第

- (1) 国土交通省の防災・減災施策——関東地方整備局における取り組み
牛腸宏氏(関東地方整備局企画部総括防災調整官)
- (2) さまざまな防災エキスパートの活動
仲川博雄氏(元(一社)関東地域づくり協会関東地方防災エキスパート事務局長)
- (3) 講演「地震と技術」
中島威夫氏((一社)関東地域づくり協会地域づくり研究所客員研究員)



四支部合同講習会開催状況
(東京臨海広域防災公園：12月3日)

平成30年度関東ブロック
災害復旧事業技術講習会を開催

11月21日（水）、当協会および公益財団法人神奈川県都市整備技術センター等との共催により、東京都北区の滝野川会館において「災害復旧事業技術講習会」を開催しました。本講習会は関東地方で災害復旧業務に携わる関係者を対象としています。

当初は7月24日の開催予定でしたが、7月の西日本豪雨災害対応のため講師の派遣が受けられなくなったことから一旦中止とし、改めて開催することとなりました。

今回は225名が参加し、災害復旧事業制度や留意事項など、講師の話に熱心に耳を傾けていました。

- 【共催】一般社団法人関東地域づくり協会
公益財団法人神奈川県都市整備技術センター
一般社団法人建設コンサルタンツ協会関東支部
一般社団法人全国測量設計業協会連合会関東地区協議会・東京地区協議会
一般社団法人全国地質調査業協会連合会関東地質調査業協会
- 【後援】国土交通省関東地方整備局
公益社団法人全国防災協会

■ 講義内容

- 「災害復旧事業制度について」
「害復旧事業の基本原則」
中田悌二氏(国土交通省水管理・国土保全局防災課災害査定官)
- 「害復旧事業における留意事項」
佐藤睦雄氏((公社)全国防災協会災害復旧技術専門家)
- 「神奈川県における道路災害の査定事例について」
宮入拓也氏(神奈川県県土整備局都市部技術管理課主査)
- 「関東地方整備局の災害対応について」
塚本一三氏(国土交通省関東地方整備局企画部緊急災害対策調整官)



災害復旧事業技術講習会

平成30年度公益助成事業紹介

関東・水と緑のネットワーク平成30年度交流会

関東地域づくり協会では、公益財団法人日本生態系協会と共催して、関東地域の身近な風景や自然、人とのかわり・つながりを創出する拠点を、「関東水と緑のネットワーク拠点」(旧「関東水と緑のネットワーク拠点百選」)として選定し保全活動を支援してきました。

第1回から第10回までに選定された拠点はのべ115箇所。いずれも各団体によって良好な自然環境が保全されてきました。これまでに選定した拠点および活動団体のつながりを深めるため、平成28年度から選定団体を対象

とした交流会が開かれており、保全活動での悩み、創意工夫などの情報交換の場となっています。

平成30年度は10月27日(土)に、千葉縣市川市南行徳市民センターにおいて開催されました。午前中には、千葉県行徳鳥獣保護区(市川野鳥の楽園)の現地見学会があり、都会に残されている自然の動植物を見学し、午後には、第10回の選定団体への選定証授与式と、第1回選定団体の認定NPO法人行徳野鳥観察舎友の会の活動報告と今回選定された団体による活動報告が行われ、そ

の後参加者同士の意見交換会が活発に行われました。

これまでの選定状況

第1回	(平成21)	24
第2回	(平成22)	11
第3回	(平成23)	16
第4回	(平成24)	11
第5回	(平成25)	8
第6回	(平成26)	13
第7回	(平成27)	14
第8回	(平成28)	5
第9回	(平成29)	5
第10回	(平成30)	8
合計		115

都県別の選定団体数

茨城県	7団体
栃木県	6団体
群馬県	10団体
埼玉県	22団体
千葉県	21団体
東京都	24団体
神奈川県	22団体
山梨県	3団体



第10回で選定された団体の皆さん

地域づくり研究所活動報告

平成26年9月から活動を開始した「地域づくり研究所」。地域の人々を対象とした防災や社会資本に関する啓発活動、地域の防災ネットワーク構築支援、防災体験学習施設に来館する子供たちを対象とした防災語り部等の活動を行っています。

今年度も、夏の「先生のための防災学習支援講座」に続き、有明の東京臨海広域防災公園内にある防災体験学習施設「そなエリア東京」へ来館する小中学生を対象に

した「防災語り部」を中心に活動しました。来館した学校がある地方の地震災害記録や、関東大震災、阪神淡路大震災、今年発生した北海道胆振東部地震などの被災写真等を使用した分かりやすい講義に、受講した児童生徒は熱心に聞き入っていました。

「防災語り部」活動のほかにも、関東地方防災エキスパート四支部合同講習会」においても客員研究員が「地震と技術」と題した講演を行い、聴講者からはとても勉強になったとの声がありました。

地域づくり研究所の主な活動(9月以降)

(1) そなエリア東京「防災語り部」

9月 5日(水)	岡山和生氏(石川県珠洲市立緑丘中学校3年生)
10月 3日(水)	中島威夫氏(広島県庄原市立東城中学校2年生)
10月 5日(金)	猪股 純氏(栃木県栃木市立部屋小学校6年生)
10月16日(火)	大嶋光男氏(茨城県常総学院中学校2年生)
11月14日(水)	宮尾博一氏(青森県六ヶ所村立第一中学校2年生)
11月21日(水)	岡山和生氏(千葉県千葉市立平山小学校5年生)

(2) 小田原箱根商工会議所主催シンポジウム

11月20日(火)	中島威夫氏(県西地域の未来について(都市と交通基盤を考える))
	パネルディスカッション:コーディネーター

(3) 関東地方防災エキスパート四支部合同講習会

12月 3日(月)	中島威夫氏(講演「地震と技術」)
-----------	------------------

そなエリア東京で「防災語り部」として栃木県の小学生に地震防災について講義する猪股氏(10月5日)



防災エキスパート四支部合同講習会で講演する中島氏

母子島遊水地

小貝川激甚災害対策特別緊急事業

会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、
苦勞や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。
第36回は小貝川の母子島遊水地の建設に携わった近藤浩二さん、藤井隆一さん、
田上澄雄さんとともに現場を訪ねました。



昭和35年入省、平成9年退職



株式会社ユーディケー執行役員、技術顧問。昭和46年入省、平成16年退職



西松建設株式会社顧問。昭和46年入省、平成24年退職

① 昭和61年8月の小貝川水害では、多数の家々が軒下まで浸水した
(提供:下館河川事務所)



2



3

② 小貝川水害の緊急復旧の様子

(提供:下館河川事務所)

③ 小貝川激甚災害対策特別緊急事業

(激特事業)の起工式(昭和62年1月)

(提供:下館河川事務所)



1

④ 小貝川水害の復旧と再発防止のために行われた激特事業について振り返る3人



4

同じような大災害が再び起きないように…… 小貝川激甚災害対策特別緊急事業

昭和61(1986)年8月4日。その日の夕方から5日にかけて、小貝川流域には激しい雨が降り続いた。その結果、100年に一度の洪水に耐えるという計画規模を目標に整備を進めていた小貝川が、それを遥かに上回る大洪水に見舞われた。浸水面積は4,300ha、4,500戸が浸水し、被害総額は400億円に上った。中でも、小貝川と大谷川が合流する母子島地区周辺は、5つの集落すべてが軒下まで浸水する被害となった。

この洪水からの復旧と再発防止のために採択されたのが、直轄河川激甚災害対策特別緊急事業(以下、激特事業)であり、その中心となったのが母子島遊水地の建設である。

田上澄雄さんは、昭和61年7月から平成元年3月まで工務課設計係長として下館工事事務所(現・下館河川事務所)に勤務した。洪水当日の様子を知る一人である。

「その日、本局で打ち合わせをして夜9時頃に事務所に戻ったときには雨がかなりの勢いで降っており、事務所

に待機しておりました。小貝川の上流にはダムがないので、降った雨はそのまま流れてきます。出水状況の連絡はどんどん入ってくるのですが、現地に行けないものだから、状況がなかなか把握できません。各方面から状況が確認できないかと言われましたが、下館市内のいたるところで浸水しており、外に出られるような状況ではまったくありませんでした」

田上さんら事務所の職員たちは、洪水直後から、緊急対応に追われた。

「緊急復旧としては大きく破堤した2箇所^{はてい}の他、破堤寸前の漏水箇所^{ろうすい}や堤防の法面崩落^{のりめんほうらく}など数多くありました。とても下館工事事務所だけでは対応しきれません。本局や近隣の事務所からたくさんの協力を得ました。破堤箇所については『お盆前までになんとかする』というのが事務所のミッション。多くの協力のおかげで一定の対応は終えることができました。しかしその後、被害調査をすればするほど、いろんな箇所で被害が生じていました。中下流は広範囲な漏水、上流は施設災害。災害調査と復旧工事はその後しばらく続きました」

藤井隆一さんは昭和61年10月から昭和63年3月まで



⑤ 遊水地に5m盛土して造成した集団移転地。小貝川の土砂を利用したことで堅固な地盤ができた。移転地の周囲に植樹した桜も大きくなり、春には地域の人々の目を楽しませている



⑦ 母子島遊水地の主な施設は、周囲堤のほかには田谷川水門、初期湛水池、越流堤、西石田排水機場、川神馬排水機場がある



⑥ 川神馬排水機場。設置されたポンプは0.5m/sという非常に小さいサイズだが、地域のために活躍している。「周囲の人に熱望された排水機場です。これを造る決定をしたおかげで、集落の移転を承認してもらえました」と近藤さん



⑧ 移転地の記念碑



調査課長として下館工事事務所に勤務した。

「小貝川の洪水当時は、関東地方建設局河川管理課の洪水担当の補佐を務めていたため、小貝川の状況は逐一確認していました。とにかく雨の降り方が普通ではなかった。私は7日には現地に入って現場で対応した方々に状況のヒアリングを行いました。まさかその後下館工事事務所勤務になるとは思っていませんでしたが」

5年間で実行した 5集落109戸の集団移転

下館にやってきた藤井さんの最大のミッションは、「母子島遊水地を“法的に位置づける”こと」であったという。公共工事は“情”“理”“法”の3つの要件にかなっていないとかならない。小貝川では以前にも浸水被害が発生していたため、付近の住民からはすでに水門の建設が要望されていた。また、小貝川と大谷川が合流する地点であるにもかかわらず水門等がなく、母子島地区に遊水地を造ることは合理性にかなっていた。つまり“情”と“理”は要件を備えており、課題として残っていたのは“法”の部分だけだった。

「小貝川は利根川の支流です。河川の整備にはバランスが必要で、小貝川だけ特に手厚くすると、利根川水系全体の均衡が崩れてしまいます。法的に位置づける根拠として、種々議論がありましたが、結果的には当時の河川法の範囲内で『工事実施基本計画の改定』として位置づ

け、再び同じ規模の大きな洪水になっても耐え得るよう、母子島だけでなく幾つかの遊水地を造って処理することになったのです。水系全体のバランスを崩すことなく計画を位置づけるための理屈づくりが一番苦労したところですね」(藤井さん)

動き出した激特事業の中で、最大の難関となったのが5集落109戸の集団移転である。この重大な仕事を担った一人が近藤浩二さんだ。近藤さんは、昭和61年10月に下館工事事務所に来た折はまだ京浜工事事務所の用地官としてであり、翌昭和62年3月まで応援として下館に併任。同年4月から平成3年5月まで、激特事業のために置かれた用地第二課で課長を務めた。

「集落をそのまま嵩上げするか、集団移転するかがまず議論されました。集団移転と決まってもすんなりとはいきません。地域社会がばらばらになったのでは意味がないのです。全員そろって移ってもらうことが原則でしたが、元の土地に残りたい人、いっそよそに移りたいと言う人などさまざま。最後まで心が動いていた人もいました」

集団移転を進めるにあたっては地元市役所や移転となる集落の人々が作った協議会と打ち合わせを重ねた。特に力を貸してくれたのは市役所だ。地元の詳しい情報を得ることができ、バックアップは非常に心強かったという。

集団移転を余儀なくされた人々は、補償問題などさまざまな不安を抱えていたが、一番の心配は地盤の問題である。何も無いところに土を盛って宅地を造るのだ。「十



9



10

9 10 田谷川水門と水門上から見た護岸。環境配慮型で周囲になじむ



11



12

13 水門から母子島遊水地を望む。左手奥の集団移転地のほかはほとんどが水田だ。「子々孫々まで安心できるまちづくりができました」(藤井さん)



13

11 12 越流堤はかごマット(鉄線でできたかごに石を詰めたもの)で施工。「経済的で、補修も簡単なのでこの方法で設計・施工され、30年経ってもきれいですね」(田上さん)

分に強固なのかと多くの人が不安に思ったようです」(近藤さん)

田上さんもこれに大きくなずく。

「沈下しないか、締め固めは充分かと心配していたようで、毎日工事を見に来る人もいました。しかし、現場を見ることが、しっかりやっていると安心してもらうことができたようです。そもそも、この集団移転地の盛土は80万㎡も必要で、その土をどうやって用意しようかと、使える土を探して調査課とよく歩きました。結果的に、小貝川の上流から川の中の玉石交じりの土を集めてきたのです。これがいい土でね。土を取れば流下断面は増えるし、堅固な盛土ができるし、言うことなしでした」(田上さん)

安心できるまちづくりに 全力を尽くした

激特事業期間は5年間。この限られた時間で集団移転と遊水地の整備をすべて完了しなければならなかった。「時間との闘い」と3人が共に口をそろえるように、簡単なことではなかった。

ありがたかったのは地元の方々はじめ、関係した人たちの熱意だと近藤さんは言う。

「移転先になった土地の持ち主の中には5集落以外の人もありましたが、その方々の理解と協力も得られましたし、補償に関しても市や県、国、関係する役所とも綿密な打合せを重ね協力して調整することができました。皆さん

の協力がなければ、とても5年間で109戸すべての移転はかなわなかったでしょう」(近藤さん)

地元の人と交渉する中で、移転の条件として排水機場や水門など施設の要望も次々と出たが、「それを計画の中に理屈づけて位置づけするのが私の仕事。大変でしたが、子々孫々まで不安のないまちづくりに貢献できたと思います」と藤井さんは振り返る。

当時の下館工事事務所長であった福田昌史氏から、設計に際して「一つでも新しい技術を盛り込め」と口癖のように言われたと田上さんは言う。

「どの施設もそれほど大きいものではありませんが、一つ一つに職員一体となり最先端の技術を導入しました。越流堤にはキヌ・マット(かごマット)を使用し、川神馬排水機場はゲートにポンプを一体化。田谷川水門の脇もコンクリートで固めず緑で覆う環境配慮型の護岸にしました。ここで試した技術は後の仕事で生かすことができましたから、本当にいろいろなことを勉強させてもらった現場でした」(田上さん)

幸いにして、母子島遊水地完成後、小貝川に氾濫を起こすような大きな洪水は起きていない。水門から遊水地全体を見渡すと、のどかな田園地帯にしか見えない。

万が一の備えが、使われなくて済めばよい。しかし、同じような規模の洪水が再び起きたそのときにも、あの災害は繰り返させない。母子島遊水地はその決意の証であり、後世まで人々の生活を守り続けるだろう。



鮮魚が、米が、人が行き交った 木下河岸



かつて関東地方は河川水運の発達した地域でした。
その証として各地に残るのが河岸です。
それらの河岸の歴史と現在を訪ねるシリーズ。
第15回は千葉県印西市の木下(きおろし)河岸です。



利根川下流に位置する木下河岸は古くから
人と物の移動が盛んに行われた。現在その
跡には説明板が立てられている

鮮魚や米などが積み降ろしされた

江戸時代初期、幕府はそれまで東京湾と結ばれていた利根川の流路を、水害防止などの理由で東に移す工事を始めます。利根川東遷事業です。工事は承応3(1654)年に完成。銚子口に流れるほぼ現在の流路となりました。

これに伴い利根川の水運は、銚子周辺の鮮魚や太平洋東廻り舟運で運ばれる年貢米などの輸送で盛んになりました。利根川沿岸にはそれらの物資の積み降ろしを行う河岸が幾つもあり繁栄します。木下河岸もその一つでした。

木下河岸はもともとは対岸の布川(茨城県利根町)とを結ぶ渡船場でした。それが徐々に発達し河岸となったのです。木下河岸では多くの物資が扱われましたが、中でも大消費地である江戸に送り出す鮮魚は重要でした。銚子湊や霞ヶ浦周辺から江戸に向かう鮮魚は、利根川を木下河岸まで送られま

す。ここで陸揚げされた鮮魚は木下が起点の木下街道を通り行徳まで運ばれます。行徳河岸でまた船に積み替え、新川・小名木川などを経由して日本橋に向かったのです。また木下河岸は元禄年間(1688～1704年)には幕府の城米(有事に備えるための米)の津出し河岸として公認されるなど、利根川水運の一大根拠地として栄えました。

木下茶船で三社めぐりを楽しむ

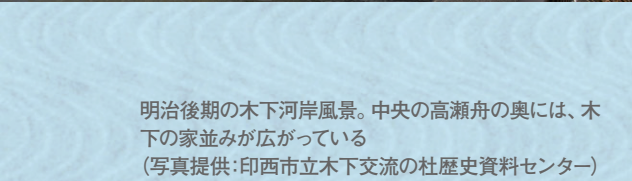
木下河岸のもう一つの特徴が人の輸送です。江戸から多くの人が木下河岸を目指し、ここから船に乗って各地に向かったのです。代表が鹿島神宮、香取神宮、息栖神社の三社をめぐる遊覧船です。遊覧船は木下茶船と呼ばれ、要望があれば銚子付近まで行きました。船は貸し切りで、小さい船



木下河岸を経由する物資を格納した吉岡家土蔵。明治24(1891)年に建造されたものであり、修復を経て現存している



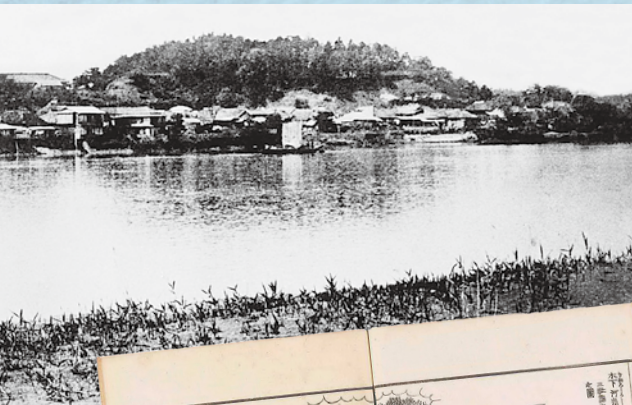
木下は水郷の町。木下河岸近くにある六軒川では川めぐりの船に乗ることができる



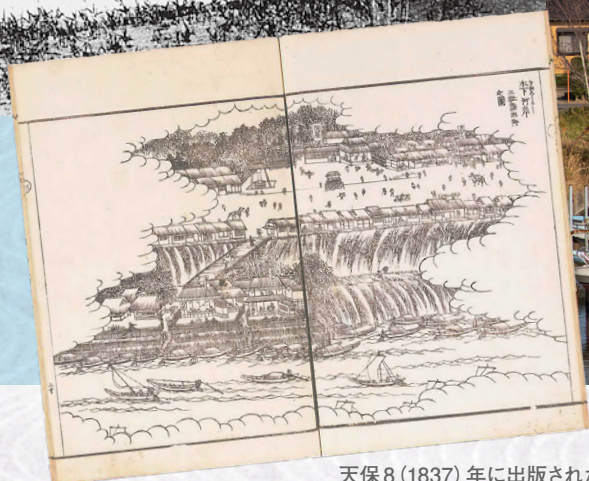
明治後期の木下河岸風景。中央の高瀬舟の奥には、木下の家並みが広がっている
(写真提供:印西市立木下交流の杜歴史資料センター)



江戸時代から木下にある旅籠。国登録有形文化財に指定され、現在はカフェやまちかど博物館として営業している



茶船でめぐった三社のうちのひとつが息栖神社。一の鳥居まで船で入ると、奥に二の鳥居が覗ける



天保8(1837)年に出版された「利根川図志」には当時の木下河岸の様子が描かれている
(資料提供:埼玉県立図書館)

は4人乗り、大きい船は8人乗り。木下茶船は江戸で大きな人気を博し、18世紀末頃には年間約1万7,000人が乗船したといひます。松尾芭蕉、十返舎一九、渡辺華山、小林一茶など著名な文人、学者、芸能人も木下河岸を経由し三社めぐりなどを楽しんでいます。

その木下河岸で船や人の出入りの管理などを担っていたのが河岸問屋の吉岡家です。河岸には銚子屋、武蔵屋などの旅籠があり、多くの旅人を迎え入れたのでした。

明治になると利根川には川蒸気船が就航。木下河岸の繁栄は続かかみえましたが、明治34(1901)年に開通した成田鉄道が流れを変えます。水運は次第に衰退し、木下河岸の歴史は幕を閉じることになりました。



大災害が契機となり、 埼玉の砂防発祥の地となった

埼玉県比企郡ときがわ町は、小鹿野町と共に埼玉県砂防発祥の地の一つとされています。明治43(1910)年に関東全域を襲った台風により、小鹿野町やときがわ町(旧都幾川村)において大規模な土砂災害が発生。死者・行方不明者は347名に上りました。この災害が契機となり始まったのが、埼玉県初となる砂防事業です。

大正4(1915)年に、国は都幾川・吉田川・赤平川の3溪流を県内初の砂防指定地に指定しました。翌年、秩父^{おおくぬぎ}大櫛砂防工営所を開設。工事は、都幾川の支川から始まり、その後、本川という順番で進められました。

埼玉県西部を流れる都幾川は、荒川水系の一級河川です。水源は堂平山^{どうだい}(標高876m)で、下流で越辺川^{おっぺ}に合流します。上流部一帯は急傾斜地が多く、大雨が降るたびに大量の土砂が下流に流出していたといいます。

都幾川の支川である七重川にあるのが、今回ご紹介する七重川砂防堰堤群です。急勾配の川に自然石が積み上げられた、およそ190mにわたる階段状の堰堤は、「百段

の滝」とも呼ばれています。

七重川砂防堰堤群は、平成19(2007)年に選奨土木遺産に選定されました。選奨土木遺産選考委員であり、埼玉県の土木事業に携わっていた小林寿朗氏は、堰堤の建設についてこう話します。

「砂防堰堤の初年度工事は、大正5(1916)年11月に始まり、翌年3月31日に竣工しました。工事は石材採取、割石、床掘りと続き、石積みという流れで進められました。2月下旬頃から、床固工、護岸工、溪間張石工、積苗工等を施工したと、当時の資料には記録されています。

現場からほど近い山に採石場を設け採取して加工した石を人力で運び、積み上げたそうです。山腹が崩壊し、堆積した溪流で、多量の石材を運搬することは相当な労力を強いられたと思います」

1個の重さが130kg以上という規定をクリアした石であれば、形は問わなかったといいます。

問題はその石をどのようにして運ぶかです。当時、重機やトラックはもちろんありません。また、林道もない山奥だったため、作業はすべて人力で行われました。モッコを使い担ぐか、大きな石は4~8人くらいで運んだそうです。



関東の土木遺産 第36回

埼玉県初の砂防施設

七重川 砂防堰堤群

埼玉県



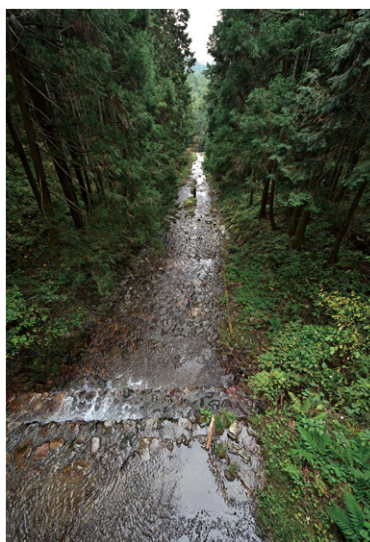
土木遺産のプレート

七重川砂防堰堤群。
階段状の堰堤群が上まで続き、
「百段の滝」と呼ばれる

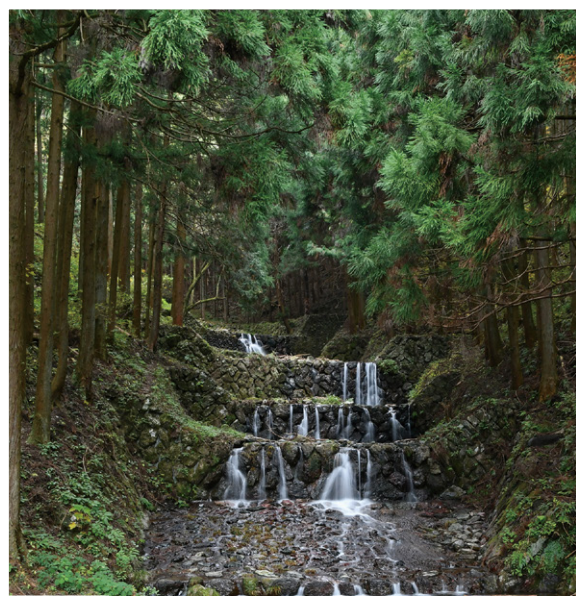
土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。



それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第36回は埼玉県比企郡ときがわ町にある七重川砂防堰堤群です。



上流から見た堰堤部



現場より上流で採取した石は半割にした丸太を枕木のように並べ、ソリに載せて下流に下ろしたといわれています。工夫を凝らした様子がうかがえます。

県外の職人から指導を受けた 石積み技術を生かして

七重川の砂防堰堤は、大きな石の隙間に小さな石を積んで造られた巨石空石積堰堤です。石積みの技術は、岐阜県安八町や墨俣町の職人から指導を受けました。

「採取した石は加工して使用したといわれています。不揃いな石を組み合わせる積み上げるには、相当な技術が必要とされます。職人の腕の見せどころだったのでしょう」(小林氏)

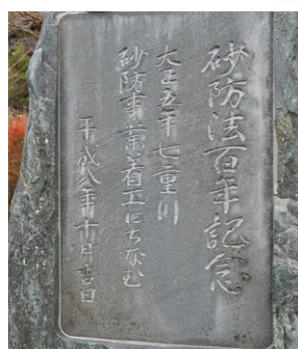
石を積む際は、板樋という木製の樋で川の流れを迂回させてから、河床を掘る床掘りを行い、その後、下流から順に石堰堤を積み上げていきました。一段積むごとに上流部に砂利を敷き、高低差をなくしてから石積みをするという作業を繰り返していったのです。



コンクリートで補強された箇所もあるが、建設当初の石積みが残る



埼玉県砂防発祥の地の記念碑。砂防法制定100年を記念して、ときがわ町に建立された



(上) 建設当初の七重川(大正5年頃)
(右) 大櫛工営所(大正5～昭和58年)
出典:埼玉県治水砂防協会『埼玉砂防100年の歴史』



建設当時の砂防工法を遺し、 次世代につなげる

小林氏は同遺産の価値を次のように述べます。

「現在はコンクリートで補強されている箇所も多くありますが、竣工から100年以上経過した今でも当時の石積みや谷間の張石工などが残っていることが高く評価されています。崩れやすい山を積苗工などで守りながら、護岸工事がしっかり行われている点も評価されるポイントです。埼玉県は、1/3が山地です。山地は西北部にあり、急峻という特徴があります。山を守りつつ、人々が安全に暮らしていける環境を整える必要があります。埼玉県初の砂防施設となった価値ある遺産です」

土木学会は七重川砂防堰堤群を次のように評価します。

「近接・連続した堰堤から成る流路工で、大正・昭和初期当時の砂防工法を遺す」

砂防堰堤の両岸には、西川杉が勢いよく空に向かって伸びています。階段状の石積み堰堤は、自然豊かな景観を邪魔することなく堂々としています。住民を災害から守り、自然との共存を実現した堰堤群。これからも地域にとって大きな存在であり続けることでしょう。

会員のひろば

このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです

関係者プレゼント用のだるま



大洋ホエールズに始まり48年

プロ野球観戦は、小学生の頃に兄が部活の合宿代を稼ぐためビール売り（当時は瓶）のアルバイトをしていた川崎球場（今はアメフト専用球場）に、阪神ファンの父親に連れられて行ったのが最初でした。当時、阪神タイガースのライトは、カークランドが守っていて、金網越しに握手した記憶が鮮明に残っています。普通ならそこで阪神ファンになるパターンですが、生家が川崎市内だったことと兄の影響もあって大洋ホエールズファンになり、48年間飽きることなく応援しています。

当時の大洋は、やたら打ちまくる試合と淡泊な攻撃に終始する試合がある極めて大味なチームで「もう少し上手なゲーム運びができないものか?」と首を傾げることが多々ありました。個性的な選手が多く、外野手は中塚、江尻。内野手は松原、シピン、ボイヤー、米田という鉄壁の布陣で、特にファースト松原選手が内野手からの送球を前後180度に開脚して捕球する姿は、プロ野球の醍醐味を感じられるプ

レーでした。

横浜スタジアム(ハマスタ)

そんな球団も、1978年に本拠地がハマスタに遷り、チーム名は、横浜大洋ホエールズ～横浜ベイスターズ～横浜DeNAベイスターズに。オーナーは、大洋漁業～TBS～DeNAとなり、最近ではほとんどの試合で満員札止で、現在は観客席を増やすため再来年にかけてスタンドの増設工事が行われています。球団存続の危機やスタンドに閑古鳥が鳴いていた時期を思うと、隔世の感があります。

応援!

年間の観戦スケジュールは、2月の宜野湾キャンプに始まり、3月のオープン戦、4月からの公式戦、(+ごく稀に10月のCS1、CS2、日本シリーズ)という流れで、ホームとビジターを合わせ、年間80～125試合ほど観戦しています。

半纏をまとい、将棋駒の形のボードや提灯を掲げたりして応援歌やチャンステーマなどを大声で歌って応援する観戦スタイル。稀にテレビ中継に映ることもあって、普段、連絡を取らない

I ☆ BAYSTARS

濱田英嗣

元 関東地方整備局総務部契約管理官



横浜スタジアム

私の応援スタイル!

兄弟からは「テレビで生存が確認ができる」と冷やかされたりしています。

時々、応援しているチームが負けていると怒りながら途中で帰るファンがありますが、私の場合は、圧倒的な負け試合の時でも、勝ち試合の歓びの倍増（と敗因分析）のため、試合終了まで観戦するようにしています。

そんな繰り返しの春から秋ですが、ビジターや地方の開催試合では、地場の美味しいお酒や肴を挟んで、私設応援団（全国星覇会）の皆さんや名古屋、関西、広島そして球団発祥の地「下関」のファンの方々との交流を深めるなど、試合とは別の愉しみも多くあります。

負けても勝っても「I ☆ Baystars」。

そんなファンを目指し、これからも応援を続けていきます！

（文中、敬称略）



応援用の提灯

会 員 情 報

平成30年10月1日～
50音順・敬称略

新会員をご紹介します 新しく1名の方が入会されました。これからよろしくお願いいたします。

氏名	現勤務先
宮地 淳夫	戸田建設株式会社

お悔やみ申し上げます 10名の方々に心からご冥福をお祈り申し上げます。

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
小室 彬	平成30年7月	建設大学校 副校長
伊澤 一泰	平成30年11月	霞ヶ浦 総務課長
雨宮 義幸	平成30年11月	横浜国道 経理課長
高橋 英次	平成30年11月	北首都国道 出張所長
中島 祥介	平成30年12月	東京湾岸道路調査事務所長

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
松本 定男	平成30年12月	本局 総務部 財産管理官
高野 誠	平成30年12月	長野国道 副所長
野澤 大吉	平成31年1月	利根川上流 出張所長
三野 四郎	平成31年1月	関東 道路部長
林 正夫	平成31年1月	四国 企画部長

編集委員会だより

2019年1月

年

が明けもう1カ月。時の経過は早いものです。1月という1日の出も遅くなり朝7時でも薄暗く感じられ、床を離れるのがつらい時期です。

1年で一番日が短いのは冬至。では、冬至は日の出が1年で一番遅く、日の入りも一番早いのでしょうか？ 日の出が一番遅いのは1月6～8日頃（冬至の2週間程後）で6時51分頃、日の入りが一番早いのは12月5～7日頃（冬至の2週間程前）で16時27分頃。冬至は日照時間が一番短い日ですが1年で一番日の出が遅く、日の入りも早いというわけではないのです。

反対に1年で一番日が長いのは夏至。でも日の出が一番早いのは4時24分頃で夏至の1週間程前、日の入りが一番遅いのは19時01分頃で夏至の1週間程後。冬至と同様にずれています。この1～2週間のずれは、地球が傾いていることや楕円の公転軌道により起こる現象のようです。普段、気にも留めないことを深く調べてみるのも楽しいかもしれません。寒さの一段と厳しいこの時期、暖かい春はもうすぐそこです。体調を崩さずにお過ごしください。

（編集委員 K・N）

編集委員

● [関東地域づくり協会]

泉達也
澤田晋
堤盛良
中村一夫
野橋明彦
前田隆徳

[会員]

田中良彰 (大成建設 (株))
望月美知秋 ((株) 日水コン)

ピックアップ

第14回

関東の道の駅

村民と移住希望者の 触れ合いの場を 目指して



道の駅上野



国道299号に面する
道の駅「上野」

平成27年度の「重点」道の駅に選定された道の駅「上野」は、平成30年4月には一部リニューアルを終えたが、さらに施設を拡張し、平成31年度のグランドオープンを目指している。

上野村の顔として生まれ変わる道の駅「上野」取材した。

保存食を中心に、豊かな山の幸が並ぶ

道の駅「上野」は平成6(1994)年、群馬県内で最初に開業した道の駅です。平成30年4月にリニューアルオープンし、利用者は倍増。利用者の多くは観光に訪れる人々ですが、「憩いのスペースやレストランを設置し、パンの製造も始めたことで、地元の人も以前より大勢訪れてくれるようになりました」と、指定管理者として道の駅を運営する、上野村農業協同組合総務課の月田智課長は説明します。

上野村は山間部で水田がなく、農地も限られています。道の駅で販売される商品の中心は、「十石みそ」をはじめとする古くから発達してきた保存食。他にはきのこ、イノブタの加工品、少量の野菜などが、バラエティ豊かに並び、訪れる人の目を楽しませています。

販売所として以外に、「上野」は移住窓口としての役割も期待されています。上野村は人口約1,300人のうち約16%が移住者。平成元年度から行政主導で移住者の受け入れ態勢を整えてきた成果です。上野村役場振興課の佐藤伸課長補佐は「まだ具体的な窓口としての機能は備えていないのですが、この道の駅のスタッフたちもターン



イノブタがお出迎え



特産品である十石みそやしいたけ、保存食品や野菜、イノブタの加工品などが並び



パン屋のない上野村で、予想以上に好評だったパンコーナー(右)。奥のキッチンで焼いている



上野村の職人によるクラフトも販売



者。誰と話しても上野村のことや移住の実際が分かります。移住を考えている人が気軽に相談できる場として道の駅を活用してもらいたと思っています」と話す。実は佐藤さんも月田さんも移住者の一人。ふれあいの場にしたいという願いが伝わってきます。

地元のひとと力を合わせて魅力を発信

来年度には、裏を流れる神流川に下りられるテラスも完成予定。「上野村の自然を楽しめる、写真映えするスポットになるはず」と、お二人も完成を心待ちにしています。

「みんなで作っていく道の駅が目標。農産物を出荷してくれる農家も少しずつ増えています。地元の人にはぜひ、一緒にこの道の駅を盛り上げていってもらえたらうれしい」(月田さん)

「村長は、この道の駅を『上野の顔になる施設にしたい』と話しています。近隣観光の拠点として、また村民の憩いの場として、観光客にも地元の人にも気軽に立ち寄ってもらえる場にしていきたいですね。まだまだ農産物も少ないので、6次産業化を拡大したいと考えています」(佐藤さん)

今後は、住民を講師にしたワークショップや地元のひとと移住希望者の交流会など、さまざまな形で人と人をつなぐ企画を展開していきたいと意欲を語ってくれました。

上野村役場振興課の佐藤伸さん(左)と、指定管理者として道の駅を運営する上野村農業協同組合の月田智さん

